



青

---

kobayashi-kinka

---

ぼんやりとテレビを見ながら菓子パンをつまんでいるうちにもう正午近くになってしまった。テレビの出演者の大げさな言動や騒がしいCMをただ目で追いながら僕はパンをつまむ。八個目のパンの袋をあけて食べ始めたのだが、もうさすがにこれ以上食べたらもどしてしまいそうだ。コップに残っていたオレンジジュースを飲み干して居間の大きな窓から庭に出た。空は雲一つない快晴だ。昨日の深夜からずっと居間のソファに座ってテレビを眺めていたので日差しがとても強く感じる。僕は屈伸をしたり上体反らしをして体を伸ばした。庭から玄関の脇にある駐車場を見てみたが車はなかった。

それは昨日の夜のことであった。いつも通り仕事を終え夜遅くに帰って来た母が、何気なくノックもせずに僕の部屋のドアを開けてしまったのだ。母は裸でベッドに横になっている僕と妹を見てしまったのだ。そのあと母は大声で何かを叫び、車に乗って家から出て行った。妹は布団の中に潜り込んだ。布団をくるんで横になっている妹に話しかけたのだが彼女は壁の方を向いたままで何も返事を返さなかった。父がどうしたんだと一階の居間から呼んでいたのだから、僕はささっとスエットを着て居間に行った。正直に話すわけにもいかず、かといってどんな嘘をつけば良いのか分からなかった僕は、黙ってテレビを観ることにした。父は何度か僕に尋ねただけで、僕は何も答えずテレビを見続けたのだった。

昨夜あんな事があったというのに庭の白い囲いの先は、あいかわらず青い海が広がっている。今日は風も弱く波も穏やかだ。そういえば先月ぐらいに、うちのボートのオイルを交換しておいたと父が言っていたことを思い出した。

僕の部屋に行くともまだ妹はベッドの上で布団にくるまっていた。僕はベッドに腰かけてその固まりをゆすった。

「そろそろ服を着なよ、今からボート乗りにいかない。」

返事はなかった僕はリュックサックに何枚かのCDと居間からもってきた菓子パンとジュースを詰めた。妹を布団から引き出し服を着せて歩いてボートの泊めてあるところに着くのになんだかんで一時間ぐらいかかってしまった。エンジンをかけ僕たちが乗ったボートはゆっくりと港を出た。ある程度沖に出て周りを確認した。時間帯もあってかあたりに漁船が全くいない。舵を適当に切ってエンジンの回転を最大にする。ババババウうるさいエンジン音に負けないぐらいにコンポのボリュームを最大にする。妹が手で耳を塞ぎ眉にしわを寄せた。僕は座る位置を妹の隣に移して彼女の肩に手を回した。僕たちはの方に背中を預け仰向けの状態になった。

空はやはり雲一つない、波は沖に来たから多少は大きくはなってきたが普段釣りで来ているときに比べれば湖なのかと思ってしまうくらい穏やかだ。妹は日に反射されてきらきらしている波を眺めている。そういえば彼女と二人きりでボートに乗ったのは初めてかも知れない。僕も釣りの道具を積まずにこんな格好でボートに乗ったことなんてない。

レゲエのスローテンポなパーカッションのリズムにあわせて僕は男性ボーカルを真似てでたらめに大声で叫び始めた。どんなに大声で叫んでも海上には僕の声が反響するものはない。海と空はでたらめな僕の節を吸い込んでいく。

そのまま僕は三曲ぐらい大声で叫び続けた。隣の妹を見ると彼女は僕を見て笑っていた。やっと笑ってくれた。僕は妹をこちら側に引き寄せ髪を撫でた。

しばらく僕たちは無言で体を触り合っただけでまどろんでいたのだが突然妹が口を開いた。

「あそこに島があるよ。」

彼女の指差す方を見ていると峰が二つ出ている小さな島があった。その島の方角に舵を切った。

島にたどり着いた。浅瀬に来たのでエンジンを止めた、僕はボートから降りてボートのロープを引っ張って岸に向かって歩き出した。島はとても小さく、建物も見当たらないからたぶんこの島は無人島なのだろう。気が付くと妹もボートから降りていた。彼女は僕の脇に来て僕の手をにぎった。

もう夕暮れになっていた。二人で砂浜に腰掛けて沈んでゆく夕日を眺めた。たき火の木を探さなくとも僕は島の山の中へ入って行った。

岩陰から鬼が出て来て妹を喰った。